

2017年1月22日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：創世記4：8－16

タイトル：「しるしを下さる主」

---

### 創世記4章8－16節

はじめに少しだけ前回のことを振り返りたいと思います。

アダムとエバにカインとアベルという二人の息子が与えられました。

カインとは「得る」という意味であり、また弟のアベルは「空しい」という意味の名前でした。

カインはその名の通り、人類が罪の中に居ながら、神から与えられた新しい命としてエバが『私は「得た」』と、その名を神からの恵みとして名を付けたのですが、それがいつの間にか、神から与えられ、神によって得る(た)というのではなく、自分自身によって自分自身のために「得る(た)」という意味で「カイン」である！と、カイン自身の心はそういう思いで満ちていました。そしてその思いがそのまま彼の捧げ物に表れました。

一方、弟のアベルは、その名が「空しい」という意味から、おそらく彼自身が思いめぐらしたであろう、『人にとって本当に「空しい」ものとは一体何か?!』と、そう悩む中から、神こそが唯一の希望である!ということを経験し、そしてその思いが最上の捧げものを神にささげるという信仰に至りました。

それゆえ、「アベル」は「空しい」のではなく、神にのみ目を留め、義と認められた者でありました。ですから、私達もカインの様ではなく、このアベルのように「神にのみ希望がある!」という信仰を持ちましょう!というのが前回でした。

それを受けて、本日の8節からになります。話は再びカインが主語となり始まります。

・ ・ ・ ・

カインは先の6, 7節で神から直接、しかもはっきりと語り掛けられましたが、しかしそれには答えもせず、神を無視して弟アベルに話しかけ、彼を「野」へと連れ出しました。

ここに記されている「野」とは、アダムが罪を犯してもなお神から耕すようにと与えられた「土地」のことです。つまりカインがアダムから受け継いだ彼の職場と言えます。

もしかするとカインは弟アベルに「自分の畑を見せてあげるよ!」と、誘い出したのかもしれませんが。

そしてアベルは「兄が畑を見せてくれるなんて・・・」と、喜んで兄の畑を見に行っただけではないでしょうか。

しかし、そこでなんと!カインは、実の弟アベルに襲い掛かり、彼を殺してしまいました。この「襲い掛かる」とは「(計画を持って)立つ」という意味があります。とするなら、カインはとんでもない計画を持って、実の弟アベルを殺したことになります。しかも6－7節で神から語り掛けられた直後ですから、ほんのわずかの間で、カインの心には殺意が芽生え、計画実行へと行動を起こしたことになります。

本当に恐ろしいことです。

けれども、こうしたカインの行動は、何もカインだけに限ったことでなく、現代にいたって  
もなお、人が罪を犯す時には、まさにカインと同じ様な心の変化(背景)があると言えます。  
つまり、人は自分の行いが正しいと認めてもらえない時に、妬みや怒りに陥りやすいという  
ことです。

そしてその妬みと怒りは、我をも失わせて、神からの語り掛けも、あるいは人からの忠告を  
も受け入れることが出来ず、ついには正しい判断がでず、自分の間違った正しさを示そうと  
して、他のいかなるものをも排除しようと実の弟(肉親)までも殺すほどになります。

そしてこれこそが、まさしく救い主として来られたイエス様を神(主)として認めず、十字架  
で磔にして「除け・除け(殺せ・殺せ)」と叫んだ、私達人間の姿そのものではないでしょ  
うか。

そういう意味では、私達は例外なく皆、確かにカインの心を受け継いでいると言えます。パウ  
ロは自らを罪人のかしらと記していますが、私自身もまさしくそうです。妬みやすく怒りに我  
を忘れてしまいます。

ですから、妬みと怒りが出てくるときには、私達は決していい加減に扱わずに、本当に注意  
しなければなりません。

こうした人間の内面を見事に見抜いていたのか、イギリスの詩人エリオットという人は、こ  
んなことを言っています。

「動物はまことに気持ちのいい友だちである。彼らは、いかなる質問もしないし、いかなる  
批評もしない。」

人は自分が間違っているときにはなおさら、何にも云わずに受け止めてくれるものに心を開  
くのかもかもしれません。その最も良い例が「動物」だとエリオットは言っているのですが、私  
達は例外なく罪の指摘には実に弱いものです。だからこそ危険です。罪を受け入れにくいの  
です。そうして罪への問いかけを無視していくといよいよ罪が死を生み出していきます。

それゆえ神様は、カインが殺害という大きな罪を犯す前に、カインの捧げものに関して、彼  
の心が良くないことへの悔い改めの機会を、直接「**なぜあなたは憤っているのか？なぜ顔を  
伏せているのか？**」と、語り掛けることを通して、カインに悔い改めの時与えてくださいま  
した。

カインは、この時に自分のプライドを捨てなければなりませんでした。そして自分の考えや、  
思い込み、そうしたすべて捨てて、主の御心はいったいどこにあるのかと信仰を持って自分  
の心を探り、神の前に悔い改めることが必要でした。

しかしカインには、そのことがどうしてもできなかったのです。  
なぜでしょうか？

それが、あのアダムとエバが罪を犯して食べてはならないと言われた「善悪の知識の木の実」

を取って食べたという「罪」が原因でした。

罪人の私達は、カインのように、神様よりも先に自分の考えが正しいと、どうしても思ってしまいます。そして罪を指摘されると怒ります。そして神様の御言葉に従うよりも、この世の常識の中で判断してしまうことのほうが多いです。また御言葉を読んでも、この世の常識の中に御言葉を置こうとしてしまいます。

ですから、私達がカインの様に成らないためには、まず第一に「自分の過ちを認めること」が必要です。

そして次には、その過ちを教えてくれる「神からの問いかけである御言葉にしっかりと心を開く」ことです。

そしてこのことができるのが、唯一「信仰者」と言えます。

信仰が無ければ決して、自分の過ちを認めることも、主からの語り掛けに耳を傾けることもしません。

カインには、まさにその「信仰」が無かったのです。

そしてこの世の中では、教会こそは、その「信仰者」の集まりです。罪を罪として指摘し、愛を持って互いに戒め合うことができる唯一の場所が「教会」です。これはこの世のいかなる交わりにもできないことです。ですから、私達信仰者はうわべの愛ではなく、心からの真実の愛を持って愛し合える交わりを持っています。

けれども、もし、教会の中で「あの人にこんなことを言われた」、または「あんなことを言われた。」と腹を立てるなら、もしかするとカインと同じ過ちに私達も陥ることがあるかもしれません。

信仰者が罪を指摘された時は、まずそれを受け入れることが大切です。人によっては、ただ言いたいだけのこともあるかもしれませんが、それでも受け入れ、信仰を持って自分を見直すことが私達にはいつも必要です。

神はそうした罪のなかに居る私達に、御言葉を通して、また祈りを通して、そして礼拝や信仰の友との交わりを通してさらに自らの過ちを気づかせてくださいます。

それでも、カインのように何度も何度も神からの語り掛けを無視してしまうことがあります。カインに至っては、神のことばと悔い改めの機会を無視し続けて、ついには弟アベルを殺害してしまいました。

神は、そんなカインであっても、決して見捨てずに語り掛けてくださいました。

それが9節です。

**9 v 「主はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのではないですか。」**

この「どこにいるのか」という言葉は彼らの父母であるアダムとエバが罪を犯した時に語られた主の言葉と同じです。

この言葉を耳にした時には、カインは「はッと!!」気付かなければならなかったはずですが。そしてこの時は、わざわざ「あなたの弟アベルはどこにいるのか」と、カインにあえて「あなたの弟」と語ることで、その存在の尊さを強調し、神はアベルの存在の尊さをカインにも分かってほしいと願っているかのようです。

それでも、カインはいっこうに悔い改めようとせず、「**知りません。私は自分の弟の番人なのではないでしょうか**」と、むしろ神に対して嘘を言い、そして嫌味な言い方して神に口ごたえをしています。

カインのこの言葉もまた、アダムとエバが神に対して言い訳した言い方に非常に似ています（「…この女がくれたので食べたのです」 Gen3:12）。

この箇所(聖書)は、カインがアダムの罪の過ちを受け継いでいるという「負の連鎖」をはっきりと記して、罪が罪を呼び、同じ過ちを繰り返してしまう危険性を本当によく教えてくれます。

さて、10 節から、神はいよいよ、頑ななカインに対して裁きの宣告をされました。

10-12 v 「そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。

今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。

それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ。」

神はカインに、10 v で「聞け。・・・叫んでいる」と言われました。

これはカインが、それまで頑なに自分の思いから離れられずに、自らを正当化しているその彼の心から、意識を離れさせ、今起こっている罪の現実をきちんと見つめるようにと、自覚させるために言われた言葉と言えます。

そうして神はついにカインに、与えられていた土地さえもみな失ったことを彼に悟らせました。

13 v からは、その事の重大さを知ったカインが、「**わたしの咎は、大きすぎて・・・**」と、突然泣き寝入りをしますが、そこでも彼は悔い改めようとはしていません。それどころかむしろ 14 v で「**ああ、あなたはきょう私をこの土地から追い出されたので・・・だれでも、私を殺すでしょう。**」と、自分の置かれた状況を不幸だと嘆いて、不満を漏らし、悲劇のヒーローを演じる、まさに自自己憐憫(じこれんびん)に陥っています。またカインは、実の弟を殺しても何と思わなかったのに、今度は自分の死を恐れています。

それゆえ彼がこのように嘆いたのは、自分の罪の大きさを認めて悔い改めたからではなく、自分が犯した罪の結果によってもたらされた罪の罰に対して悲しんでいるからにすぎません。カインは、結局、頑なな心のままなのです。

それでも神はなお、そんなカインに対して 15 v で「**それだから・・・誰も彼を殺すことが無いようにとカインに一つのしるしをくださった**」と、彼を保護していただきました。

さて、この「しるし」とはいったいどのようなものなのでしょう。そのことを考えて終わりたいと思います。

まず一つ目は「カインを殺すものは7倍の復讐を受ける」とあります。ですから、その「しるし」とは、カインを殺そうとするものには、主からの復讐が望むことを感じさせ、そして「恐れ」させるものであったということです。それゆえカインは殺されることから逃れられました。

二つ目は、この「しるし」は「カイン自身が自分は他者から殺され無いと感じてわかるものであった。」ということです。

つまり、カインは殺されずに保護されているのは確かに神から与えられているこの「しるし」のゆえであると理解できるものであったということです。

このようにカインに与えられた「しるし」とは、主からの復讐があると人々に恐れさせ、そして自らは神に保護されていると感じ、理解できるものであったと言えます。

それがこのカインに与えられた彼への「しるし」です。

それは何より、どこまでも頑なで心を持ち、実の弟アベルを殺害するというとんでもない罪を犯し、そしてその果てには自己憐憫に陥いるというどこまでも罪人のカインへの、神からのどこまでも深い愛の御手そのものであったと言えます。

言い換えれば、神に守られ、神に愛され、どんなに罪を行い、神から離れて行こうが、神はその御手の届くところに、カイン(自分)を置いてくださり、そして保護し救い出し、悔い改めに導いてくださる全き愛のお方であるという「しるし」が、カインの中に分かる形として、神ご自身がカインに与えてくださったということです。

そしてそれは、今日まさしく私達に与えられている、イエス・キリストによる十字架の贖いとそれによって与えられた救いの約束です。

この約束は、聖霊によって私達が確かに感じる事ができる「確証」へとなっています。聖霊はカインの時代にも確かに働き、彼の心の内に働いてくださっていたということを知ることができます。

神様は100%真の愛のお方です。神様の愛には一点の曇りも、偽りもありません。ですから、私たちはカインのように自分の心を頑なにせずになりたいですし、たとえカインのように頑なに心にされたとしても、いつかこの真の愛のお方の語りかけに恐れずに耳を傾けたいと願わされます。

そうして私達が罪のどん底の奥深くに行ったとしても、またどんな状況に陥ったとしても、神は決して見放されるお方ではないということを体験し、今度は心の底から神に感謝する者へと変えられたいと願わされます。神はそのを「しるし下さる主」なのです。

最後に2ペテ3：9を読んで終わります。

Ⅱペテ 3:9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。